
ユイにゃん 青春物語

アップルマン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ユイにゃん 青春物語

【Nコード】

N5782M

【作者名】

アップルマン

【あらすじ】

AngelBeatsより。ユイ日向音無奏ユリたち皆恋愛します。ビバリーヒルズ青春白書の始まりですf(^^)；

一番星 願いと出会い（前書き）

天使高等学校は偏差値70です。

一番星 願いと出会い

ここは、東京都練馬区にある天使高等学校。

ピンク頭に黒いシッポを付けた小柄な少女ユイは今年入学したばかりだ。彼女はこれからの学園生活に夢を抱かせていた。

「はぁーやっぱり軽音部ってカッコイイ！入るしかないんじゃないじゃコルアー！」

時々口の悪さが出てしまう彼女はそう意気込むと、軽音部のドアを叩く。

Girls Dead Monster 通称ガルデモは、全校生徒の憧れの的だった。メンバーは、ギターのひさ子・ドラムの入江・ベースの関根。ボーカル＆ギターをしていた岩沢は、2日前に親の事情で惜しまれながら転校していった。現在は、ボーカルオーディションを実施中である。

「あたしならやれる！」

ユイのオーディションの順番がやってくる。

「あたしのソウルを見せてやるー」

歌う歌はCrow Song! ジャーニン!!

「ー私音楽が好き! もっともっとやりたい!... なんか体が熱くなるうー」

「うらららアアアー!」

ユイは調子にのり齒ギターをするも耳をさくような音に、ガルデモのメンバーは苦痛な表情をする。

「ストップ! ストップ!!」

茶髪のポニーテールで姉御肌であるギターのひさ子は、思わず演奏を止める。

「もう帰っていいよ。」

「ーが~~~~ん! ! ! ! !」

ユイは落胆し、軽音部を後にした。

ユイは中庭の土手に仰向けになり、空を見ていた。

「あたしは何をしても上手くいかないなあー」

その時、なんか白い物が向かってくる…

「きゃーっ！」

ボコッ！つと大きな音をたて、頭に当たりボールは転がっていく。

ユイはそれに近づき手にとった。

「野球のボール…？」

「おーい！すみません！」

振り返ると、野球部のユニフォームを着た男の人が走ってくる。

「大丈夫でした！？ケガはないかな？」

その少年は青髪のサラサラヘアで、野球部員とは思えない容姿であつた。オーディションの失敗と頭の痛みに苛立ちを覚えたユイは、彼に爆発する。

「人が気持ちよく寝てんのに邪魔するとはどーいうことだクルア！
だいたい野球部は昔から坊主だあ！チャラチャラしてんじゃねーぞ
ってクウラアー！」

時々出る口の悪さを、ユイは初対面の人に出してしまった…。

「はあ！お前もピンクの頭だろーが！人のこと言えないだろーが！」

「私は軽音部なんだからいいんだもん！野球部には野球部の頭つてもんがあるんだクルアー！」

と言いながらユイは、青髪の野球部員に後ろから飛び付き首を締め
る。

「いたたたた…！そーくるかあ！」

青髪の野球部員はユイの腕を掴み、地面に押し倒す。

「いったーい！」

青髪の野球部員はユイの両手を押さえ、馬乗りになる。

「きゃー！先輩許してください！ギブです！ギブ！すみませんでしたあー！」

「解ればよろしい！」

そう言々と青髪の野球部員は、ユイを優しく起こす。

「ちよつと待て！お前は年下なのか！？」

「ただ後輩キヤラ演じただけです！」

ユイは言う。彼の名前は日向。本当に先輩であつた。

――あれっ！？あたし落ち込んでたはずなのに――

一番星 願いと出会い（後書き）

読んで頂きありがとうございます！

二番星 自己紹介とチャンス（前書き）

学校は15時半に終わります。

二番星 自己紹介とチャンス

「はぁー」

ユイはため息をついていた。

「ーこれから何しよつかないー」

考えても答えは出ない。

ユイは力なく中庭に寝転ぶ。今日も雲ひとつないきれいな空だった。
…。

「ーあれ！？白い…ー」

ゴン！と何かが頭にあたる。

「いったーい！！」

野球ボールのようだ…。ユイは頭を撫でながら叫ぶ。

「またかコルアー！！」

「まあまあ！そんなに怒んなって！落ち着こうな。」

青い髪の少年、日向は苦笑いしながら言う。

「センパイ！昨日の今日ですよ！。…やっぱり許さんのじゃコルアーい！」

そしてプロレスが始まった。しばらくして…

「センパイ！いたーい！ギブです！ギブギブ！すみませんでしたあ！」

非力なユイは、奇襲を仕掛けない限り日向には勝てないのだ。

「お前はなんでそんなにケンカっぱやいんだ！？なんか変なヤツだな。」

日向はユイの隣に座る。

「センパイ練習は大丈夫なんですかあ？」

「んーオレー人居なくても野球部は大丈夫だろ。」

日向は伸びをしながら言う。

「あーセンパイ球拾いばかりやらされてそうですもんね。」

「オイ…！」

日向はユイに両手で襲いかかるフリをする。

「センパイ…冗談でーす！」

ユイは日向に笑いかけた。

「お前名前何て言うんだ？」

日向はユイに向かって言う。お互い自己紹介をしていなかったのだ。

「ユイです。センパイはあ！？」

「日向だ。よろしくな！」

「はい！よろしくお願いしまーす！」

ユイは元気よく答えた。依然として日向は練習に戻ろうとしない。

「センパイあんまり野球好きじゃないんですか！？」

「ならとつくに辞めてるわ！いや…お前こそいつもこゝで寝てるみたいだけど、何かあつたのかあ？」

図星な質問にユイの体はギクつとなる。

「いや…別に大したことないですよ！ただこの場所が好きなんですよあー！」

ユイは慌てて言う。

「そつかあ。何かあつたらいつでも言えよ！相談乗るから。じゃあな！」

そう言つてユイの頭を撫でると、日向は練習に戻って行った。

「ーなんだ。あのセンパイ超優しいじゃんー」

ユイはまた一人になって少し寂しくなった。あの人と会う前は一人でも寂しくなかったのに…。

ユイはとりあえずもう一度横になることにした。

「あつこんなとこにいた。おいお前…」

ユイは誰かに声をかけられた。

「えっ！…ひさ子先輩？？どーしたんですか！？」

ユイは憧れの先輩の登場に驚く。

「ボーカルオーディション終わったんだけど皆何か物足りなくて困ってたんだ。」

「ぎゃふん。そ…それで!？」

ユイは傷つきながらも質問を返す。

「お前だけ途中だったからもう1回やるよ!」

ひさ子は付いて来いと手招きし、音楽室の方へ向かう。

「うそっあたしまだチャンスがあるんだ…!」

ユイは笑った。

二番星 自己紹介とチャンス（後書き）

読んで頂きありがとうございます（T・T）

三番星 歓喜と失望（前書き）

よろしく願います（＜＞）

三番星 歓喜と失望

ユイは夢中だった。

Crow SongだけでなくAlchemy・My Songなど立て続けに計5曲も熱唱した。ユイを止める者は誰もいなかった。

ジャーーン!!

「はあはあ…」

完全燃焼だった。これでダメでも納得できる、ユイは心の奥からそう思った。

余韻が残るなかひさ子が口を開く。

「アンタの歌声いまいち心に響かないけど…」

「ぎゃふ…」

ユイは下を向く。

「でも…魂は伝わったよ。オーディションメンバーの中でアンタが一番ガルデモのファンだな。」

「えっ!」

ユイが顔をあげると目の前に右手があった。

「よろしくな。ユイ!」

ひさ子は笑った。

「は、はい!」

ユイは笑いながら泣いた。

そして、両手でひさ子の手を握りしめた。

「ーやったあ！わたし…わたしガルデモなんだ！ー」

ユイはいつもの中庭に行く。でも、いつもとは気分が全く違う。なぜか野球ボールが飛んでくるところを期待している。

だが、都合良くボールが飛んでくるはずがなかった。

「はあ…帰ろ。」

「ーはっ！そーいえばわたし喜びを分かち合える友達がまだ学校にいない！？ー」
大問題だった…。

グランドの脇道から野球部の練習が見えた。

「ほんと落ち込んでる時はボールぶつけるくせに、嬉しい時は何も
ないなんて空気の読めない先輩なんじゃクラー！ってあれ…」

日向は笑っていた。茶色のサラサラヘアの野球部員とじゃれあい、
なにやら楽しそうな様子。

「なにあれ…デレデレしてる…？？手つないで…？？」

ユイは2人に釘付けになる。

「ーえっえっ…ー」

「センパイって…。」

ユイはガクツと脱力してしまう。

「…関係ねーし！ユイにゃんはルンルンで帰ってやるんだクルマ！
！」

ユイは川沿いを歩いて帰った。夕日が眩しくて前が見えない。

「って友達作らないと！」

ユイは夕日が目に染みる。

「センパイのバカアアア！！！」

三番星 歓喜と失望（後書き）

つづく...

四番星 敵と味方 (前書き)

天使高校の生徒会長は学年関係なく投票で決まります。

四番星 敵と味方

今日は朝日が眩しい晴れ晴れとした空だ。ユイはいつもの川沿いを登校していた。

「るるるるーん！」

ー何はともあれ今日からガルデモだああー！ー

「張り切って練習するんだクルあー！！！」

ユイはガッツポーズで意気込んだ。

「。。。」

ふと視線を感じたユイは川辺を向く。

真正面には太陽が…、ユイは目を細めた。

ーま、眩しいー…誰…天使！？ー

「あつ同じクラスの…えつと委員長！？」

ユイの視線の先には白髪の小柄な女の子、立華かなでが立っていた。

「おはよう。」

かなでは無表情でユイに言う。

「おはよー！かなでちゃんだよね！？家この辺なの？？」
ユイの質問にかなではうなづく。

「この川が大好きでいつもここを通っていくの。」

かなではそう言うとき少し微笑んだ。

ーかなでちゃんって…可愛いー！ー

二人は一緒に登校することにした。

「今日テストだけど、ユイちゃんは気合いばっちりだから大丈夫そう。」

「え…えーっ！テスト！？かなでちゃん私そんなの聞いてないよお…委員長クラー！」

ユイは突然の知らせに焦っている様子。

「私そんなこと知らないわ。」

かなではユイとは正反対にそこはかたなく冷静だった。

「かなでちゃん…冷たいよお。」

ユイは寂しくなってしまうかなでに抱きついた。

「じゃあ学校着いたらテストに出るところ教えてあげるね。」

かなでは優しい声で言った。

「ありがとー。」

ユイはまたまたかなでに抱きついた。

「ユイちゃん暑いわ。」

ユイは抱きついたまま顔を上げる。

「…やつぱりかなでちゃん冷たいんじゃないじゃクラー（泣）」

なぜかユイはかなでと友達になることを決意したのであった。

「じゃあユイちゃんさっきの意気込みは何だったの？」

かなでは不思議そうに尋ねた。ユイの熱血さが珍しい様子。

「よくぞ聞いてくれました！ユイにゃんはガルデモのボーカルに選ばれたんだよおー！」

「へー…。」

満面の笑みで両手を広げハイテンションで決めていたユイも温度差に気付き恥ずかしくなる。

「かなでちゃん…ユイにゃんは寂しくなっちゃうよぉ!!」

すると、かなでは真剣な表情でユイを見る。

「ユイちゃん…私生徒会に入ろうと思ってるの。」

「生徒会…!？」

「ガルデモってゲリラライブしたり、あと校内に過激なファンもいるから生徒会内ではBAD GIRL通称BGって言われてるブラックリストに載ってるのよ。」

「へ!?へえ…。」

ユイの額には冷や汗が…。

「ユイちゃん私たち敵だったのね。」

かなでは無表情で言う。

「ガードスキル…」

「かなでちゃん!そんなこと言わないでよー!!ってかガードスキルって何!?わわ…物騒な棒は閉まってください!私たち絶対仲良くなれるよ!」

ユイはしつこくかなでに抱きつく。

「ユイちゃん…暑いわ。ガードスキル…ハンドソニックバージョン4…」

「わわわ…かなでちゃん!ガルデモの時は敵かもしれないけど、でも普段のユイにゃんは敵なんかじゃないよ!かなでちゃんの味方だよ…そうだよ。私たち友達なんじゃあコオルアー!!!」

ユイは恐る恐る顔をあげると、かなでと目が合う。

「…えっ…」

かなではもう武器を構えていなかった。ユイに向かって笑いかけている。

「かなでちゃん…」

「ユイちゃんって面白いね。」

かなでは満面の笑みだった。

「かなでちゃん…大好き！これからよろしくなんじゃクルアー！」

「ところでかなでちゃんそのへんで拾ったような汚い棒早く捨てなよあ！」

「だめよ！これはガードスキルなんだから。ユイちゃんにはわからないわ。」

「へー…」

二人はその日学校を遅刻してしまった。

四番星 敵と味方 (後書き)

呼んでいただきありがとうございます！(^ o ^) /

五番星 ガルデモと生徒会（前書き）

かなでは全国模試1位です。

五番星 ガルデモと生徒会

その日のテストは散々だった。

かなでは正確にテストのヤマを教えたはずなのに、全て無駄となった。

「か…かなでちゃん…」

「ユイちゃんどうして?」

「ぎゃふ…」

ユイにはこの高校はレベルが高かったようだ。机に肘をつきユイはうなだれる。

「…が…ん…」

その時教室のドアの方から声が聞こえた。

「おーい!かなで。今日もお弁当ありがとな!」

茶髪のサラサラヘアの男の子だ。

ユイも声につられ振り返る。

「あつ!」

「…日向センパイがデレデレしてた茶髪の野球部員だ!」

「音無くん。」

かなでは駆け足でその男の子の元へ行く。

「今日のは余りものでちょっと自信ないけど。」

「良いって!気にすんな。残さず食べるからな!お前もしっかり食べて大きくなれよ。」

そう言う音無はかなでの頭をポンポンと撫で、どこかへ行ってしまった。

「――はっもしかして！――」

「かなでちゃんさっきの人彼氏！？彼氏だよね！？」

「うっん。幼なじみの1コ上の先輩なの。」

ユイは期待外れな顔をする。

「えーすごくお似合いだよー。付き合っちゃえばいいのに！」

「私は好きなんだけど。向こうは男の子という方が楽しいみたい。」

その言葉でユイは確信を得た。そして…

「ぎゃふ…」

「――やっぱりそーなんだ…はあ――」

ユイはテストのことなどすっかり忘れていたが、心底落ち込んでいた。

その時教室のドアの方からまたまた声が聞こえた。

「おい！ユイー！」

ユイが振り返るより先に教室が騒然となる。

「わあ！ちよつとひさ子先輩だよ！」

「きゃーこんなに近くで見れるなんて！」

「おい！見る！ガルデモだぞ！ガルデモ！」

ユイはクラスメイトの騒ぎように逆に引いてしまった。

「――ちよつと待って…――」

ユイの顔がみるみる青ざめていく。

「――こんな皆の憧れガルデモの次期ボーカルがユイなんて知ったら…フリーガン並みの暴動が起きちゃうんじゃない…やばっ怖い――」

「ユイー！今日の初練習は授業終わったらすぐするからダッシュで来いよ。」

「ひさ子先輩だめえー！！」

ユイのほうが数秒遅かった…。ひさ子は不思議そうな表情をするも、じゃああと教室を後にした。

教室はすっかり静まりかえっていた。

「あれ！？皆さん何か聞こえましたかー…？」

ユイはとりあえずすつとぼけてみた。

だが、駄目だったようだ。

「はあー岩沢さんの代わりがコイツなの！？」

「ぎゃふ…」

「えーやだあー！！」

「ぎゃつふ…」

「こんなイカれた小娘にはムリだろ！」

「ぎゃふーん！ひどいー！てめえらあユイは何言っても傷つかない
とか思ってたたら大間違いなんだぞー！ってかまだ入学して2週間な
のにてめえらどんだけ団結してんだクラァー！次のゲリラライブ見
てろってんだ！皆感動させてやる！！号泣することになるんだクル
アーーー！」

教室は再び静まりかえった。

「はあはあ…やばいよお！ついつい大きなこと言ってしまったあ
ー」

「いまのは聞き捨てならないわね！」

「えっ…！？」

ユイが振り返るとパールピンク色の頭にリボンをした気の強そうな女の子が立っていた。

「誰!？」

「生徒会長のユリよ!これからよろしくねBAD GIRLちゃん
…」

「ひいひい!」

五番星 ガルデモと生徒会（後書き）

読んでいただきありがとうございます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5782m/>

ユイにゃん 青春物語

2010年11月27日11時46分発行